智儼撰『金剛般若経略疏』訳註（一）

櫻井　唯

一　はじめに

智儼撰『仏説金剛般若波羅蜜経略疏』（以下、『金剛般若経略疏』）は、菩提流支訳『金剛般若波羅蜜経』の註釈である。本書の撰述時期は、玄奘訳『大般若経』に言及することから、その翻訳が完了した六六三年、智儼六十二歳以降の撰述と考えられている。(1)

管見の限り、『金剛般若経略疏』には①続蔵本（龍谷大学蔵刊本）、②称名寺本、③大正蔵本（金陵刻経処本）の三系統のテキストが現存する。続蔵（続蔵一―三八）には、南宗の乾道五年（一一六九）に記された如宝という人物による識語(2)がある。それによれば、本書は智儼の没後、中国では一度失われ、十二世紀頃に再び韓土（朝鮮半島）より伝来したという。当時、『金剛般若経』の註釈としては宗密や新羅の元暁によるものが主流であったが、円証という人物が朝鮮半島に残されていた智儼の『金剛般若経略疏』

を探し出し、中国にもたらしたと伝えられる。この円証が持ち帰った本とは、高麗の義天（一〇五五～一一〇一）によって刊行された続蔵（義天教蔵）である。[3] ①続蔵本の底本は、同一の識語を有する享保十三年（一七二八）刊本と考えて良いであろう。龍谷大学蔵・享保十三年刊本は鳳潭（一六五九～一七三八）の手になる写本を梓行したものであり、[4] 外題に「般若波羅蜜経略疏　上下」、巻頭に「仏説金剛般若波羅蜜経略疏」とある。また、②称名寺蔵暦応四年（一三四一）写本が現存し、これは東大寺尊勝院の経蔵本を高山寺の義天版で校合したものだという。[5] なお、③大正蔵（大正三三）のテキストは、大谷大学所蔵・光緒二十六年（一九〇〇）刊行の金陵刻経処本を底本とする。その巻末には、石埭（現在の安徽省石台県）の徐子静[6]という人物の求めによって開版された旨が記されている。

本稿では続蔵本を底本とし、「五門分別」から「序分」の終わりまでに相当する箇所について書き下しと註釈を行った。智儼が撰述した経典註釈書のうち、完全な形で残るのは本書と六十『華厳』に対する註釈『捜玄記』のみである。華厳教学において『華厳経』は一乗教、『金剛般若経』は三乗教という位置づけの違いはあるものの、今回扱う箇所には『捜玄記』と共通する記述も多く含まれる。そのため、両者を対照することで、より一層、智儼の思想に対する理解を深めてゆくことが可能になるであろう。

【表】『金剛般若経略疏』科段

○、五門分別
一、教興所由
二、蔵摂分斉
Ⅰ約一乗
Ⅱ約三乗
Ⅲ自部種類
三、所詮宗趣・能詮教体
四、釈経題目
五、分文解釈
Ⅰ序分
ⅰ証信序
ⅱ発起序
Ⅱ正宗分
ⅰ立義分
ⅱ解釈分
A 約解心顕三種般若
1 徳分量
1－1 明顕解般若離妄堅固
1－1－1 約衆生心
1－1－2 三種般若徳用
1－2 釈其余疑辨解決定
1－2－1 釈正余疑
1－2－2 泯相入実
1－2－3 校量其徳
1－2－4 顕徳殊勝
B 約其行事弁三種般若
2 挙行顕解
2－1 広顕行
2－1－1 総挙行体
2－1－2 明信行相
2－2 略顕広
2－2－1 挙総信相
2－2－2 引往事証成
2－2－3 挙勝校量以勧学
2－3－4 挙広結略
3 約彼行相顕三種般若
3－1 陳四疑問三種般若体相
3－2 広答顕相
3－2－1 釈三種般若体相
3－2－2 釈其余行疑
3－3 結成前義(7)
ⅲ究竟分
Ⅲ流通分

註

（1）木村［一九七七］四〇五頁、参照。ただし、先行研究では、『金剛般若経略疏』は智儼の撰述ではないという説も提起されている（大竹［二〇〇七］四七〇～四七六頁）。その根拠の一つは、大正蔵本の音釈（大正三三・二三九頁下）中に、智儼の生存年代よりも後に成立した、慧琳（七六八～八二〇）の『一切経音義』や『守護国界経』が引用されているという指摘による（石井［一九九六］二五一頁・註四九）。しかし、この音釈は、続蔵本および龍谷大学蔵刊本では『金剛般若経』の経文やその解釈の文とは区別され、二字分下げて記すという体裁をとり、また称名寺本には確認できない。それゆえ、この段落は読解の便宜のために後から加えられた可能性があり、少なくともこれをもって偽撰の根拠とすることはできないと言える。

（2）『金剛般若経略疏』（続蔵一―三八・二九四丁左下）。

（3）続蔵本『金剛般若経略疏』（続蔵一―三八・二九四丁左下～二九五丁右上）の識語には寿昌元年（一〇九五）に高麗国大興寺にて雕造されたとあり、また『義天録』（大正五五・一一七〇頁下）にも智儼の著述として『金剛般若経』の「疏一巻」が録されている。

（4）龍谷大学蔵・享保十三年刊『金剛般若経略疏』（一九丁）には、「大日本皇都西阜松室華厳寺主大和尚手書之蔵」とある。ここにいう「華厳寺」は享保八年（一七二三）に鳳潭が創建した華厳寺を指

すと考えられ、「華厳寺主大和尚」とは鳳潭のことであろう。

（5）金沢文庫・関靖編『一九三九』二八五頁上、参照。

（6）大正蔵の『金剛般若経略疏』（大正三三・二五一頁上）には「石埭除（ママ）子静、施洋銀四十円敬刻此経。（石埭の除子静、洋銀四十円を施して此の経を敬刻す。）」とある。ここでいう石埭の「除子静」とは、清代の金石家である徐子静（徐子愷）のことと推定される。

（7）大正三三・二五〇頁下一八行目から始まる経文については科段に混乱があり、大正三三・二四〇頁中では「究竟分」とされるが、大正三三・二四七頁上では「結成前義」として解釈分に摂せられている。本稿では「３－３　結成前義」と「ⅲ　究竟分」とを分けて記したが、両者の該当箇所は重複している。

二　『金剛般若経略疏』訳註（五門分別～発起序）

《凡例》

・本文のテキストは続蔵本を底本とし、校訂は意味を取る上で必要がある場合のみに留めている。対校本として大正蔵本および称名寺本（マイクロフィルム複製版）を用いた。称名寺本の閲覧にあたってご助力いただいた称名寺および金沢文庫のご関係者様にこの場を借りて深く御礼申し上げる。

・続蔵および大正蔵本には、註釈文の間に『金剛般若経』の全文が引用され、また『一切経音義』による音釈等が挿入されている。これらは後世に付されたものと考えられるため、本稿では省略した。

・旧字体は新字体に統一した。

・訳註は原文、書き下し文、註、解説の順序で記し、適宜科段と対応する見出し（ゴシック体）を付した。

・註番号は、校異を示す場合は原文に付し、語釈の場合は書き下し文に付す。

・註釈文中に引用される『金剛般若経』の経文は「　」で示し、繁を避けるため書き下しは行わない。

至相寺沙門　智儼　述

《本文》

仏説金剛般若波羅蜜経略疏上

○、五門分別

将欲釈文、先於文首作五門分別。一、明教興所由。二、明蔵摂分斉。三、明教下所詮宗趣及能詮教体。四、釈経題目。五、分文解釈。

将に文を釈することを欲せんとするに、先に文の首（はじめ）に於いて五門の分別を作す。一に、教を興す所由を明かす。二に、蔵摂の分斉を明かす。三に、教下の所詮の宗趣及び能詮の教体を明かす。四に、経の題目を釈す。五に、文を分かちて解釈す。

一、教興所由

初、教興所由者、金剛般若波羅蜜経者、蓋是実智之美称、真徳之通号。宗本冲寂、神凝湛一。独曜幽原、円明等覚。含暉至朗、而泯於分別。冥津玄曠、而隠於縁数。斯乃可謂衆生之本際、涅槃之円旨、因縁之実性、法界之説府。是知、真性虚融、斯無不在一言、無所不摂殊説、更無異盈。但為聖化随機、明教門非一。

為進初心菩薩、爰引根熟声聞、遂分張別分、以成空文堅固之教矣。

初めに、教えを興す所由とは、金剛般若波羅蜜経は、蓋し是れ実智の美称にして、真徳の通号なり。宗の本は冲寂にして、神 凝りて湛うること一なり。[1] 独り幽原を曜し、円かに等覚を明かす。含暉至朗にして、而も分別を泯す。冥津は玄く曠くして、而も縁数を隠す。斯れ乃ち謂う可し、衆生の本際、涅槃の円旨、因縁の実性、法界の説府なりと。是れ知る、真性は虚融にして、斯れ一言として在らざる無く、殊説を摂せざる所無く、更に異盈つること無し。[2] 但だ聖化は機に随わんが為めに、教門の一に非ざるを明かすのみなり。初心の菩薩を進めんが為めに、爰に根熟の声聞を引きて、遂に分張し別分して、以て空文の堅固の教えを成ぜん。

【註】

1 **神凝湛一**　「神凝」は『荘子』逍遥遊篇に「其神凝、使二物不一レ疵癘一、而年穀熟。」すなわち、「(姑射という山にいる神人が)その精神を凝集させると、万物が過を免れ、一年の実りも十分になる」とある。また、「湛一」はいくつかの仏教文献に用例があるが、『大乗止観法門』巻一(大正四六・六四三頁中)には、「如レ似二水静内照、照潤義殊、而常湛一一。」とある。この文脈では、真如と智が同一体

であることを、水には映し出す（照）とうるおす（潤）という二つのはたらきがあるが、水そのものは一体であることに喩えている。

2 斯無不在～更無異盈　この一節は『華厳経関脈義記』において「統法師」という人物の言葉として引用されることが指摘されている。大竹［二〇〇七］四七一～四七五頁、参照。

【解説】

第一に、仏が『金剛般若経』の教えを説いた理由を述べる。なお、この部分に関しては、既に大竹晋［二〇〇七］に書き下しがあり、本稿の作成にあたって参考にした。

『金剛般若経』という題目は、仏の真実の智慧と徳とを讃える名称である。この教えの本質は空であり、精神は一つに集まって、奥深い本源をてらし、悟りを完全に明らかにする。〔仏の智慧の〕かがやきは極まり、さらに物事の区別をなくす。これを、衆生の真の在り方、涅槃の本質的な意味、因縁という現象の本体、法界における言葉の領域と言うのである。すなわち、真なる存在は、個物としての実体がなく虚空であり、自他の区別がなく融けあっているので、どの言葉一つとっても真実でないものはなく、一言の中にあらゆる説を包摂し、それでいて他のものが入り込む余地もない。ただ、仏の教化はその対象となる衆生の機根に合わせて行われるので、その教門も多岐に亙る。〔つまり、『金剛般若経』は、仏が〕大乗の

教えに入ったばかりの初心の菩薩のために、機根の成熟した声聞を引き寄せて、広大な教えの一部を分離させ、〔金剛のように壊れない〕堅固な空の教えとして成立させたものである。

二、蔵摂分斉

第二、蔵摂分斉者、有三。一、約一乗。二、約三乗。三、約自部種類。

第二に蔵摂の分斉とは、三有り。一に、一乗に約す。二に、三乗に約す。三に、自部種類に約す。

Ⅰ　約一乗

此経所為名同小乗、所有法門主伴不具、所述文義唯局一方、唯説理門遂其解行。以此為験非即一乗、若従所流皆依一起。

此の経の所為[3]を名づけて小乗に同ずとせば、所有の法門は主伴を具えず、所述の文義は唯だ一方に局り、唯だ理門を説いて其の解行を遂ぐるのみなり。此を以て験と為せば即ち一乗に非ざるも、若し所流に従えば皆な一に因りて起る。

【註】

3　所為　　教えの対象。

【解説】

第二に、『金剛般若経』という経典の分類を三つの観点から述べる。まず、一乗の観点から解釈する。『金剛般若経』は仏弟子（＝声聞）に対して仏が教えを説くという形式をとっている。それゆえ、この経の教化の対象を小乗と同じ声聞と捉えるならば、その法門は全てを完備せず、述べるところの文義は教え全体の一部分だけに限られ、ただ形而上的な理の観点における解行を遂げるのみである。これを根拠とすれば、この経は一乗の教えではないことになる。ただし、現象世界のあらゆる存在は一体の真如より流れ出ているので、その本源に遡れば、この経は一乗の教えと同一とも言える。

Ⅱ　約三乗

第二、約三乗弁者、有二。所詮三故蔵即為三。第二、所為二故蔵即為二。

所詮三者、一謂定学是修多羅蔵所詮。二謂戒学是毘那耶蔵所詮。三慧学是阿毘達摩蔵所詮。此経是修多羅

蔵所摂。

第二門者、一小乗蔵。二大乗蔵。亦、言二乗及以三乗。云三乗者、有二義。一、約根弁、三人同依一法故。二、約法弁、対三人所軌故。此経即是大乗三蔵所摂也。

第二に、三乗に約して弁ずるに、二有り。所詮三なるが故に蔵も即ち三と為す。第二に、所為二なるが故に蔵も即ち二と為す。

所詮三とは、一に定学と謂うは是れ修多羅蔵の所詮なり。二に戒学と謂うは是れ毘那耶蔵の所詮なり。三に慧学は是れ阿毘達摩蔵の所詮なり。此の経は是れ修多羅蔵の所摂なり。

第二門とは、一に小乗蔵、二に大乗蔵なり。亦、二乗及以三乗と言う。三乗と云うは、二義有り。一に、根に約して弁ず。三人同じく一法に依るが故に。二に、法に約して弁ず。三人に対して軌する所なるが故に。此の経は即ち是れ大乗三蔵の所摂なり。

【解説】

次に、三乗の立場から論ずる。これには二説がある。

第一には、仏の教えの内容は大きく分けると定学・戒学・慧学の三種があるので、仏典も修多羅・毘那

耶・阿毘達摩の三蔵に分ける説である。この分類では、『金剛般若経』は修多羅蔵に含まれる。

第二には、小乗蔵・大乗蔵という分類であり、また前者は二乗、後者は三乗とも呼ばれる。仏が教えを三乗に分けて立てたのには、二つの意義がある。一には、機根の観点である。衆生は各々機根が異なるため、三乗に分けて説くのである。二には、法の観点である。これは三乗それぞれに規範となる法が異なるためである。『金剛般若経』は大乗の三蔵に含まれる。

Ⅲ　約自部種類

第三、自部種類相摂者、般若経依梵本二十万偈[4]、訳成六百巻。総作十六会説、処別有四。前六会同王舎城鷲峰山説。次三会同在室羅筏誓多林給孤独園説。次一会他化自在天説。次四会還同前誓多林説。次一会同前鷲峰山説。次一会在王舎城竹林園白鷺池側説。此金剛般若経、当第九会説。梵本有三百偈、今成一巻、亦、無別品。

若準説経、依処之義理亦不同。

初依処者、王舎城説、挙教自在敵非顕徳、義静相勝故也。

第二処者、表顕化生分斉、臨機済危、抜苦之相也。

第三処者、顕処校量、明教尊勝、覆蔭決定故也。

第四処者、顕教自在、防非顕徳、衆義建立、亮神之所津潤之状相也。

第三に、自部種類相の摂とは、般若経は梵本に依らば二十万偈あり、訳して六百巻を成ず。総じて十六会の説を作すに、処の別に四有り。前の六会は同じく王舎城の鷲峰山の説なり。次の三会は同じく室羅筏の誓多林の給孤独園に在りて説く。次の一会は他化自在天の説なり。次の四会は還(また)前に同じく誓多林の説なり。次の一会は前に同じく鷲峰山の説なり。次の一会は王舎城の竹林園の白鷺池の側に在りて説く。此の金剛般若経は、第九会の説に当たる。梵本に三百偈有りて、今一巻を成じて、亦、品を別つこと無し。若し説経に準ずれば、依処の義理は亦 同じからず。

初めの依処は、王舎城の説にして、教の自在もて非に敵し徳を顕し、義の静相 勝れたる故を挙ぐるなり。

第二処は、化生の分斉を顕じ、機に臨んで危きを済い、抜苦の相を表すなり。

第三処は、処の校量もて、教の尊勝を明かし、覆蔭決定する故を顕ずるなり。

第四処は、教の自在もて、非を防ぎ徳を顕じ、衆義建立して、亮(あき)らかなる神の津潤(うるお)す所の状相を顕ずるなり。

【註】

4 **梵本二十万偈**　続蔵および大正蔵には「三十万」とあるが、称名寺本に従って「二十万」とする。その根拠は、『続高僧伝』巻四・玄奘伝（大正五〇・四五七頁下）や『開元釈経録』巻八（大正五五・五六〇頁中）等では、『大般若経』の梵本は「二十万偈」、あるいは「二十万頌」とされていることによる。

【解説】

前に仏典全体の分類という観点から『金剛般若経』の位置を述べたので、ここでは般若経典群における分類を説明する。般若経は梵本によれば二十万偈あり、漢訳（玄奘訳『大般若経』）では六百巻ある。般若経には十六の会処があり、説法の場所は四箇所である。初会～第六会は王舎城鷲峰山、第七～第九会は室羅筏国の誓多林の給孤独園、第十会は他化自在天、第十一～第十四会は誓多林、第十五会は鷲峰山、第十六会は王舎城竹林園の白鷺池の側において説かれた。この『金剛般若経』は第九会の説にあたる（『大般若経』第九会・能断金剛分）。『金剛般若経』の梵本は三百偈あり、漢訳では一巻で品を分かたない。

仏が般若経の教えを説くことの意味は、それぞれの説法処によって異なる。第一に、王舎城鷲峰山の説法では、仏の教えが自在であることによって、誤った認識や行いに反対することでその対極にある徳の意味を明確にし、その悟りが勝れた空寂の相を持つ理由を挙げる。第二に、給孤獨園では、教化する衆生の

有り様を説くことで、仏が各々の衆生の機根に合わせてその危機を救い苦を除くという、救済の姿を表している。第三に、他化自在天では、説法の処を校量することによって、仏の教えが非常にすぐれていて、一切の衆生を包摂し決定する理由を明かす。第四に、王舎城竹林園の白鷺池の側では、仏の教えが自在であることをもって、誤った認識や行いを防ぐことで徳をあらわし、あらゆる義を立てて、仏の心によって照らす対象の姿を明らかにする。

智儼は『五十要問答』（大正四五・五二三頁中）において、鳩摩羅什訳『大品般若経』を三乗終教、『金剛般若経』を三乗始教の経典と定義していることが知られる。ただし、『大般若経』の訳出によって、『大品般若経』はその第二会に、『金剛般若経』は第九会に相当することが知られるようになったが、『五十要問答』にはそのことに関する言及がない。つまり、「『金剛般若経』は三乗始教の経典である」という説は、智儼が玄奘訳『大般若経』の存在を知る以前のものである可能性があり、『金剛般若経略疏』の思想内容を直ちに三乗始教の立場としてよいかは一考を要する。

三、所詮宗趣・能詮教体

第三、教下所詮宗趣及能詮教体者、有二。

一、総明宗趣。此経即用三種般若。一、実相般若。二、観照般若。三、文字般若。所以知者、為下経文具

明理行及教三義故。

第二、別明宗趣者、有五義。第一、教義相対。用教為宗、以義為趣。第二、因果相対。以因為宗、用果為趣。為下文所住及修行并調伏並約成因行義故。第三、人法相対者、用法為宗、以人為趣。為依法成仏故。第四、理事相対者、以理為宗、用事為趣。第五、境行相対。以境為宗、以行為趣。立境教欲成其行故也。

第二、能詮教体者、若約一乗、以唯識・真如為体。不可以分別智知故。若約三乗、有二義。一、同小乗教。二、同一乗教。具如経論。

第三に、教下所詮の宗趣及び能詮の教体とは、二有り。

一には、総じて宗趣を明かす。此の経は即ち三種般若を用う。一には、実相般若。二には、観照般若。三には、文字般若。知る所以は、下の経文に具さに理・行及び教の三義を明かさんが為めの故に。

第二に、別して宗趣を明かすとは、五義有り。第一に、教義相対。教を用いて宗と為し、義を以て趣と為す。第二に、因果相対。因を以て宗と為し、果を用いて趣と為す。下の文の所住及び修行并びに調伏は、並びに因行の義を成ずるに約さんが為めの故に。第三に、人法相対とは、法を用いて宗と為し、人を以て趣と為す。法に依りて成仏せんが為めの故に。第四に、理事相対とは、理を以て宗と為し、事を用いて趣と為す。第五に、境行相対。境を以て宗と為し、行を以て趣と為す。境を立てて其の行を成ずるを欲せし

むるが故なり。

第二に、能詮教体とは、若し一乗に約せば、唯識・真如を以て体と為す。分別智を以て知る可からざるが故に。若し三乗に約せば、二義有り。一に、小乗教に同ず。二に、一乗教に同ず。具さには経論の如し。

【解説】

本書では、『金剛般若経』の宗趣（教えの核心）を実相・観照・文字の三種般若と捉える。すなわち、経文の「①応云何住、②云何修行、③云何降伏其心。」という須菩提の問いとそれに対する仏の答えを、①実相般若、②観照般若、③文字般若を明らかにするものと捉え解釈していくのである（本稿のⅱ発起序、参照）。また、ここでは修行者が悟りに向かう過程を、「宗」と「趣」とを別して教義・因果・人法・理事・境行という五つの相対概念に配当することで説明している。智儼と中国の諸師の三種般若説の相違については、木村［一九七七］三八三～三八八頁、参照。能詮教体については、櫻井［二〇二〇］、参照。

四、釈経題目

第四、釈経題目者[5]、

「仏」者、此既三乗教故、仏是化身仏。

「説」者、陳章吐教故名説也。又、化仏不説、法身授与説也。
「金剛」等者、従喩名也。智難壊故喩金剛也。
「般若」等者、西域語也。此云実智。「般若」即智、「波羅」即彼岸也。所言「蜜」者、此云到也。真照之慧、窮源実相、性出無染、義顕終極、跡絶有海。故云智彼岸到也。
所言「経」者、真浄之教、文詮理緯。顕用行心、訓儀・常・則。謂之為経。

第四に、経の題目を釈すとは、
「仏」は、此れ既に三乗教なるが故に、仏は是れ化身の仏なり。
「説」とは、章を陳べ教を吐くが故に説と名づくなり。又、化仏は説かず、法身が授与して説くなり。
「金剛」等とは、喩に従うの名なり。智は壊るること難きが故に金剛に喩うなり。
「般若」等とは、西域の語なり。此に実智と云う。「般若」は即ち智にして、「波羅」は即ち彼岸なり。言う所の「蜜」とは、此に到と云うなり。真照の慧は、窮源の実相にして、性より無染を出し、義は終極を顕じ、跡は有海を絶す。故に智彼岸到と云うなり。
言う所の「経」とは、真浄の教は、文もて理緯を詮ず。行心を用て顕ずれば、儀・常・則[6]と訓む。之を謂て経と為す。

【註】

5 **第四釈経題目者**　続蔵および大正蔵では、この文の後に『金剛般若経』の題目と訳者名、および慧琳撰『一切経音義』による経題の音釈を挿入している。

6 **儀・常・則**　ここでは「経」を「儀・常・則」の意味とするが、「儀」は「義」に、「則」は「法」に通ずると考えられる。「経」を「義」の意味とする説は、古くには王弼（二二六～二四九）の易注に「経、猶レ義也。」とあることが指摘できる。「常」「法」については、杜預（二二二～二八四）の『春秋左氏伝集解』の宣公十二年の註に「経、常也。」、および「経、法也。」とある（岩本［二〇〇二］五八五頁、および五八七頁）。また、光宅寺法雲撰『法華経義記』（大正三三・五七四頁上）には「経者、訓レ法訓レ常為レ義也。」という説が見える。

【解説】

第四に、『仏説金剛般若波羅蜜経』という題目の意味を解釈する。まず、経題の「仏」とは化身の仏を意味し、その教えは言葉で表現されるので「説」という。ただし、本経は化身の口より語られたものではあるが、それは法身より与えられた教えなので、その意味では化身の仏の説ではないとも言える。仏の智慧が壊れないことを喩えて「金剛」と言う。「般若波羅蜜」は「智彼岸到」の意味である。一般的に、波

羅蜜 pāramitā は「到彼岸」と漢訳されることが多いが、ここではサンスクリット語との対応を意識した訳語「彼岸到」が用いられている（pāramitā と漢訳「到彼岸」については、渡辺［一九九七］六〇頁、参照）。本書と同じく波羅蜜を「彼岸到」と訳す例は、吉蔵撰『金剛般若経疏』巻一（大正三三・九〇頁中）等に確認できる。

「経」の語については、文（縦糸＝経）は緯（横糸）たる理を表出し、また修行者にとっては儀・常・則、すなわち規範や法則の意味ともなるとする。ここでは、梵語スートラ sūtra を漢語の「経」によって解釈している点が注意される。すなわち、スートラを「経」（または線〔綖〕）と訳すことについての説明は『捜玄記』にもあり、この部分は敦煌本『摂大乗論抄』と共通することが指摘されている（織田［二〇一七］九五～一〇〇頁）。しかしながら、「経」に儀・常・則の意味があるとする説、つまり漢語としての「経」解釈は『捜玄記』には見えない。スートラを漢語「経」の古訓に即して理解する説は、早くには『注維摩詰経』の僧肇の註（大正三八・三二七頁下）等にも見え、浄影寺慧遠はこのような解釈を「俗訓」（世俗の訓み）と呼んでいる（たとえば慧遠撰『維摩義記』（大正三八・四二二頁上）、参照）。『金剛般若経略疏』は、こうした漢語的解釈を「行心」、すなわち修行者の心の側から見た「経」の意味として教理に組み込もうとする点に特徴がある。

五　分文解釈

第五、分文解釈者、経文有三。初序分、二正宗、三流通。

第五に、文を分かちて解釈すとは、経文に三有り。初めに序分、二に正宗、三に流通なり。

Ⅰ　序分

序有二種。一、証信序。二、発起序。

序に二種有り。一には、証信序[7]。二には、発起序[8]。

【註】

7　**証信序**　通序、弟子序（阿難序）、経後序、未来序とも称する。様々な経典の冒頭に共通して説かれる①如是、②我聞、③一時、④仏、⑤説法処、⑥聴衆の六句をいう。

8　**発起序**　別序、仏序（如来序）、経前序、現在序（現序）とも称する。証信序の後に続く段落で、経典によってその内容は異なる。

初、証信序興所由者、阿楼駄教彼阿難問其未来四法。一、問経首安何字。二、問未来以何為師。用戒為師。三問未来弟子依何而住。依四念処住。第四、悪性人云何共住。以梵壇治之。
又、約仏序及弟子序・現在序・未来序等。思以準之、不労繁解。

i　証信序（総説）

初めに、証信序の興る所由とは、阿楼駄は彼の阿難をして其の未来の四法を問わしむ。一には、経の首に何れの字を安ずるかを問う。二には、未来には何を以て師と為すかを問う。戒を用いて師と為すなり。三には、未来の弟子は何に依りて住するかを問う。四念処に依りて住するなり。第四には、悪性の人は云何が共に住するや。梵壇[9]を以て之を治むるなり。
又、仏序及び弟子序、現在序・未来序等に約す。以て之れに準じて思えば、繁解を労せず。

【註】

9　梵壇　『大智度論』巻二（大正二五・六六頁下）では「梵法治」と訳す。相手と言葉を交えないこと。

【解説】

『大智度論』巻二（大正二五・六六頁中下）の所説に基づいて、仏典の冒頭に証信序を説く理由を述べている。仏弟子の阿楼駄 Aniruddha（『大智度論』の音写では阿泥盧豆）は、仏の入滅を憂いていた阿難 Ānanda に対して仏に四つの質問をするよう促す。阿難は阿楼駄の勧めに従い、仏の死後において、①その教えを伝える際、初めに如何なる言葉を述べるべきか、②誰を師とすべきか、③どのように修行をすればよいか、④悪人とどう付き合うべきか、を尋ねた。この阿難の問いに対して仏は、①如是我聞等の六句を述べ、②戒を師とし、③四念処によって修行し、④黙して語らないこと、と答えた。

また、この『大智度論』の説明によれば、証信序は仏が教えを説いた時点より後に阿難が付け足したものだから弟子序・未来序ともいい、発起序の内容はその当時、仏が説いたものであるため仏序・現在序ともいう。なお、智儼の時代よりも後の著作であるが、敦煌本の道氤集『御注金剛般若波羅蜜経宣演』（大正八五・一九頁中）では、こうした様々な序文の呼称が五種に整理され、端的に説明されている。

i　証信序（随文解釈）

序経文有六句。

一、「如是」者、大論云、信順辞。信於実法、順而敬挙也。
二、「我聞」。
三、「一時」。此有三義。一、平等時。謂無沈浮顛倒。二、相応時。謂令聞・能聞・正聞。三、転法輪時。謂正説・正受。
四、「仏婆伽婆」此有多義。即身口意満等也。
五、住処。
六、同聞衆。弁所為機、及同聞影響衆。
又釈、前之二文、局在証信。後之四句、義通発起。
問。所以無菩薩衆者。
答。般若堅固甚深難識。若影響徒衆及所為機、通菩薩者、迴心声聞及凡夫等、於斯絶分。為欲引下故、略不明。

序の経文に六句有り。
一に、「如是」とは、大論に云く、信順の辞なり。実法を信じ、順じて敬挙するなり。
二に、「我聞」。

三に、「一時」。此れ三義有り。[12]一には、平等時なり。沈浮と顚倒 無きを謂う。二には、相応時なり。令聞・能聞・正聞を謂う。三には、転法輪時なり。正説・正受を謂う。

四に、「仏婆伽婆」は、此に多義有り。即ち身口意満等なり。

五に、住処なり。

六に、同聞の衆なり。所為の機、及び同聞の影響の衆を弁ず。

又 釈するに、前の二文は、証信に局(かぎ)りて在り。後の四句は、義 発起に通ず。

問う。菩薩の衆 無き所以(ゆえん)は。

答う。般若は堅固甚深にして識り難し。若し影響の徒衆及び所為の機、菩薩に通ずれば、迴心の声聞及び凡夫等は、斯に於いて分を絶す。下を引くことを欲せんが為めの故に、略して明かさず。

【註】

10 **令聞**　続蔵および大正蔵は「今聞」につくるが、称名寺本に従って改める。この箇所の典拠である真諦訳『摂大乗論』巻五（大正三一・一八二頁）に「二、和合時。謂、令聞・能聞・正聞。」とあるためである。

11 **大論**　『大智度論』巻一（大正二五・六二頁下～六三頁上）の取意。『注維摩詰経』（大正三八・三

二八頁上）にも「肇曰、如是信順辞。」とある。また、智儼は『捜玄記』巻一上（大正三五・一六頁中）においても、「如是」を釈して「又、信順辞耳。」としている。

12 **三義有り**　真諦訳『摂大乗論釈』巻五・釈応知入勝相（大正三一・一八二頁下）の「釈曰、是時有三義。一、平等時。謂無沈浮顚倒。二、和合時。謂、令聞・能聞・正聞。三、転法輪時。謂正説・正受。」に基づく。智儼はこの『摂大乗論』の解釈を『捜玄記』巻一上（大正三五・一六頁中）でも用いている。

【解説】

経典冒頭の定型句（証信序）の一文一句を解説する。末尾の問答では、『金剛般若経』の聴衆として描かれるのが声聞のみである理由を説明している。すなわち、本経の内容は高度であるため、もし仏がそれを菩薩のために説いたのなら、菩薩よりも低い境界にある大乗に廻心した声聞や凡夫は理解することができない。ゆえに、より低い境界にある者を導くために、ここではあえて聴衆としての菩薩の存在を明かさず、声聞のみが聞いているかのように描かれるという。

ii　発起序

就其第二発起序中大分有二。

初、仏世尊訖乞食縁為前方便。二、「爾時諸比丘」下、正時集衆以顕発起。

初文有四。初、厳儀乞食即為行始。二、「於其城中」下、還帰本処顕行終。三、「飯食訖」下、為顕法方便。四、「結跏趺」下、顕定依止。

就第二集衆文、大分有四。初明衆集、及顕敬儀。二、「爾時慧命」已下、為請法方便。三、「白仏希有」下、讃仏具徳。四、「世尊云何」下、正明請問、以顕発起。

此問有四。初一、総顕発心之相。二、問所住之理。即顕問実相般若。三、問能修行。即問観照般若。四、問降伏心。即調伏方便、即問文字般若。下答準之。

其れ第二に発起序の中に就いて大分して二有り。

初めに、仏世尊が食縁を乞うに訖(いた)るを前方便と為す。二に、「爾時諸比丘」より下は、正時に衆 集むるを以て発起を顕ず。

初めの文に四有り。初めに、厳儀の乞食は即ち行の始めと為す。二に、「於其城中」より下は、還て本処に帰して行の終りを顕ず。三に、「飯食訖」より下は、為に法の方便を顕ず。四に、「結跏趺」より下は、定の依止を顕ず。

第二の衆 集むるの文に就いて、大分して四有り。初めに、衆 集むるを明かし、及び敬う儀を顕ず。二に、「爾時慧命」已下は、法を請う方便を為す。三に、「白仏希有」より下は、仏が徳を具すを讃ず。四に、「世尊云何」より下は、正しく請問を明し、以て発起を顕ず。

此の問いに四有り。初めの一は、総じて発心の相を顕ず。二に、所住の理を問う。即ち実相般若を問うを顕ず。三に、能く修行するを問う。即ち観照般若を問う。四に、心を降伏するを問う。即ち調伏の方便にして、即ち文字般若を問う。下の答は之に準ぜよ。

【解説】

発起序は、仏が舎婆提大城で乞食をする場面（大正八・七五二頁下・一三～一七行）と、須菩提が仏に教えを請う場面（同・一八～二四行）の二段に分けて説明される。後者の場面で須菩提が発した四つの問いは、「云何菩薩大乗中発阿耨多羅三藐三菩提心」は三種般若の総相を、「応云何住」は実相般若を、「云何修行」は観照般若を、「云何降伏其心」は文字般若を問うものと解釈している。

参考文献

石井公成［一九九六］『華厳思想の研究』春秋社

岩本憲司［二〇〇一］『春秋左氏伝杜預集解〈上〉』汲古書院
大竹晋［二〇〇七］『唯識説を中心とした初期華厳教学の研究―智儼・義湘から法蔵へ』大蔵出版
織田顕裕［二〇一七］『華厳教学成立論』法蔵館
金沢文庫・関靖編［一九三九］『金沢文庫古書目録』巌松堂書店
木村清孝［一九七七］『初期中国華厳思想の研究』春秋社
櫻井唯［二〇一六］「智儼撰『金剛般若経略疏』の思想的位置づけについて」『東洋の思想と宗教』第三三号
櫻井唯［二〇二〇］「隋唐における教体論の諸相」『南都仏教』第一〇一号
渡辺章吾［一九九七］「般若波羅蜜多(prajñāpāramitā)の解釈」『東洋学術論叢』第二二号